

ペシヤワール会報

No. 10



速報!

巡回診療車エンジン始動

ジープ・キャンペーンの経過報告を致します。

皆様の御協力で、現在一八〇万余円の募金をお寄せいただいております。

当初、中村医師から、現地で一八〇万円で購入できるので早急に巡回診療を始めたいとのことでしたが、今回パキスタンでの確認により、その後、性能の点で疑問があるので日本から「三菱パジェロ」を送って欲しい旨の連絡がありました。

そこで、パジェロを製造している三菱自動車工業(株)に、中村医師の活動を説明したところ、購入、輸送に関して三菱商事とともに協力の申し出をいただきました。現在、一二〇%かかる関税対策のため、パキスタンのライプ減計画の中心機関であるマリール・アデレード・レプロシー・センターに寄贈、中村医師が使用するという事で連絡をとっております。来年の初めには、皆様からの好意を乗せて、中村医師のもとに巡回診療車が届く予定です。今後、カラコルム山脈の村々を患者の方のために活躍するものと確信します。この巡回診療車募金キャンペーンに御協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

ペシャワール通信(8)

中村 哲

—韓国・麗水よりの手紙—

ペシャワール会のみなさん、お元気ですか。こちらに来て早くも三週間経ちました。ここは麗水愛養再活院というらい。センターですが、事実上、この辺では質の高い整形外科病院として機能しています。

ここは禁酒禁煙、一日が祈りで始まり祈りで終るといふ、まさに修道院入りです。静かな海辺に宿舎があつて、海の向こうは博多です。ああ、海のむこうではペシャワール会の人たちが今日も集つて…と水曜日の夕刻ともなれば恨めしげに海を見ています。

昼間は多いときで一〇例以上の手術があり、だいたい八〇%以上が足の手術で、とてもためになります。ペシャワールで最も手をやいていたのが足の故障でしたから、今度の研修は実りの多いものになりそうです。ただ、仕事が終ると少しさみしくて……。言葉が通じないのも悩みの一つで、「今日は」と「アリガトウ」だけで一日をすごしているのだから心臓といえど心臓です。今はペル

シャ語の学習でせいじつばいで、韓国語を勉強して来なかったのは手落ちでした。(暇があつたら簡単な入門書を送ってください。)

食事もパンジャブ顔まけの辛いものです。毎日毎日キムチとのたたかいです。白菜のキムチ、大根ときゅうりのキムチ、スルメのキムチ(?)、そして豆腐のキムチ。キムチというのは漬物ではなく、れつきとした主な副食であることを初めて知りました。しかし、以上のような、こしようでまっかな漬物が山のように並べて出されるのはおどろきました。何日かは舌がしびれていましたが、やつと慣れてきました。いやはや、顔つきや態度は日本人によく似ていても、やはり外国だなと思えました。

日本語は殆ど通じません。時たま、お年寄り教育を受けたことのある人は日本語で話しかけてきますが、最初のころは誰も私を日本人と思わず、「インドネシア?」「マレーシア?」等という言葉をしばしば耳にしました。きっと私が、いつものことながらフーサイがあがらぬため、日本人といえどもと羽ぶりのよい感じがするのでしょう。

以上のような次第でなんとかやっております。ペシャワール会も海のむこうで何とかやっておりますと思ひながら、(今日は水曜日)手紙を書いておきます。

みなさんも頑張つて、といいたいところですが、私はもう一つ頑張りたらず時々こつそりと喫煙しております。何かわるいことでもしているような……しかし健康によくないのでもうそろそろ止める時期かと思つています。では。とりあえず。

一九八六年七月九日



今日も元気だ
タバコがうまい

キムチは
からのい……

—らしい病棟での 小さなできごと—

●故郷ふるさと

彼はアフガニスタンからやってきた。年齢は自分でもよく知らない。多分十七歳くらいだと本人は言うが、どうみても十二〜十三歳くらいの少年である。故郷はバダクシャー（ヒンズークシ山脈の北麓）。とってもきれいなところだ。父に伴われ、三年前にペシャワールに連れてこられた。二歳上の兄も同じ病気だった。兄は入院後まもなく死んだ。いつか父が迎えに来るだろう。——それが、彼の記憶の中から拾いあげて人に語り得る全てであった。静かなものごしの中にまるで世捨て人のような、年にふさわしくない何か悟りきった面影がある。

きつと迎えに来る。と言つて帰つた父は、三年間何の消息もなかった。三年前といえは一九八三年で、ソ連軍の侵攻後、内戦が次第に激しくなつていた時期である。バダクシャーからは、パキスタン側のチトラールまで約二〜三週間歩き、チトラールからさらに二日バスを乗り継いでの道なのである。彼の父は帰途、戦闘にまきこまれて死んだかも知れぬ。あるいは……しのびなく自分の

子を捨てざるを得ない事情があつたかも知れぬ。ただはつきりしているのは、彼は、われわれの病棟の中で一人ぼつちで将来のみとおしもなく入院を続けざるを得ない、ということだ。

あるとき、私は回診中に「おい、まだいのちがあるのかい。」と声をかけたことがある。これは親しい人に対して述べられる冗談めいた普通の挨拶なのだが、少年はしばらく間をおいてさみしそうな笑いをうかべ、「先生、私のいのちはあるけれど、完全でないですよ。」と切りかえた。妙にしんみりした声の調子だったので、私も真顔になつてじつと顔をのぞきこんでみると、この年齢にはふさわしくない老人のような誇念が表情に現われてみえた。以後、私はこのような冗談を彼に言うのをやめた。この少年には何かの希望をもたせる以外にない、と私は思った。



古い記録を調べてみた。少年とその兄は、一九八三年四月三十日、この病棟に父に連れてこられた。らしい腫型のらいと診断され、兄の方は変形がひどく入院後まもなくらい反応をおこし、喉頭浮腫によつて窒息死した、とある。この時、気管切開等の救命処置は何もされず、一九八三年五月二十六日に死亡している。病院の医師からは何の指示もなかったという。その後少年は“Social Prob-lem”により長期入院、MDR(多剤併用療法)をうけ、ほぼ治癒に近い状態となつた。“Social Care”のファイルには、彼の教育と将来の自立についてごてごてとアイディアが羅列してあつたが、何一つ実現されたものはなかつた。病棟で、雑役でスタッフを助けるのが彼の唯一の日課であつた。

おそらく、彼は自分の故郷に対して愛憎の混じつた複雑な記憶を心にいだいていることであろう。元来、彼の母国語はペルシャ語であるが、入院中にウルドゥ語を覚え、パキスタン人と意志疎通は困難でなかつたので、入院する多くの患者たちをみてきた。この病棟と周辺のオールド・バザール、それに複雑な感慨をもつて追憶する彼の故郷アフガニスタン——これが、彼の世界の全てであつた。外の世界に比べれば、ミッシヨン病院のらしい病棟のスタッフたちは親切であつた。少なくとも、一人前の病人として患者をとりあつたてくれた。限られた範囲ではあつても、出来るだけのことはしてくれた。一九八四年三月にアフガン

人びいきのドイツ人のシスターが病棟管理でやってくると、特にこの少年は大切に扱われた。病気が治ってゆき、父親がいつか迎えに戻ってくるという希望をもって、よく他の病人の世話もし、スタッフの手足になって彼は働いた。

しかし、父親は現われず、ドイツ人のシスターも一年後には病棟を去り、少年の心にはいつしか暗い陰がさし始めていた。らい病棟での多くのできごと、病棟の偽善的な態度、患者同志の対立、なぐりあい、乞食のような患者の態度、スタッフ同志のいがみ合い……感受性の豊かな少年の眼にはこれらがどんなに気落ちさせるか、察して余りがある。いつしか様々の不平が、若者になりがちに強い正義感で増幅され、うちとけにくくなっていくのを私は感じていた。自分は乞食ではない。口先でイスラームの平等と同胞愛を説きながら患者たちを食いものにしていく「パキスターン」にたまらなく嫌気を覚える、と少年は述べた。

折しも一九八五年頃から、ペシャワール市内でおきた多数の爆破事件は、市民の中にアフガン人——パキスタン人の亀裂を深めさせていった。意を決して、彼はパキスタン北辺チトラールに赴き、そこで難民として定住しているかも知れぬ親戚を捜してみたようだが、消息は掴めず、この戦乱のさなかに一人で故郷に帰るのは不可能でもあったので結局ペシャワールに舞戻ってきたことがあった。

一九八五年十月に彼がチトラールに赴くべく私に許可を求めた時、おそらくこの少年は戻ってこぬかもしれない、と思った。それで、「何か困ったことがあればいつでも戻ってくるように危険な真似はせず、時を待ち、自立できるように読み書きを覚え、何か手仕事を身につけておくのも方法だ。」と私はそれとなく示唆した。「先生がおっしゃりたいことは解っています。」と彼は言った。「しかし、



それを誰がしてくれるのですか。学校に行け、訓練所に行けと皆は言うが、先生以外に誰も努力をしてくれなかった。アフガン難民の訓練校も、キリスト教会のアフガン人のための英語学校も、どこも僕を受け入れてくれなかった。」

これで彼のチトラール行きは明らかなになった。彼は余りに多くの人の気持ちの醜さをみす

ぎたのだ。それもよからう、と私は思った。彼の言うことは事実なのだ。ただ、一人前の判断をするには彼は若すぎる。夢と希望が自暴自棄に転化して、心がすさんで行かぬよう、逃げ道を作つてやらねばならないと私は考えた。

「よろしい、行きなさい。しかし、これは退院ではない。外出だ。君のベッドはそのまま空けておく。読み書き、計算の方は俺が今準備中だ。勉強しておくのは、たとえアフガニスタンに帰つても役に立つから。」とだけ述べて許可を与えた。

二週間後に彼は戻ってきた。チトラールで彼が何を考え、何を感じたか私は知らない。チトラールは私も何度も行ったことがあるが、人も自然も事実上アフガニスタンの続きであるといつてよい。美しい白雪をいただく巨大なヒンズークシュの山なみと、平和な緑のオアシスの村々の光景が、いかに強烈にこの少年の郷愁を呼びおこしたか、私は容易に想像できるのである。土埃りと騒音にみちたペシャワールの雑踏が、彼自身の不幸せな体験と重なつていかに異物のように感ぜられたことであろう。

しかし、ともかく少年はもどって来た。

「チトラールはどうだったかい？楽しんでかい？」と私がきくと、彼は初めは興奮して、ひとしきりチトラールが自分の故郷に似ていること、チトラールのキャンプでは故郷から来ていると噂をきいた伯父には逢えなかったこと、山の中で石

小屋に閉じ込められて暮しているらしい患者をみたこと等を、たて続けに話した。だが最後に、ふと声をおとして少年は私にきいた。

「先生もあのシスターのように、いつかはここを出てゆくのですか？」

「インシ・アッラー（御意ならば）、いつかはね。しかし、おまえが一人だちするまで俺はここを離れない。ともかく、今はここで手伝いをしている。悪いようにはせん。」

「心配をかけました。ドクター・サーブ。」

「案ずるな。ムサルマーン（回教徒）も、イサーイー（キリスト教徒）も、みんな何かをさがして巡礼しているのさ。結局、メッカは自分の中にあるのさ。」

「ドクター・サーブ、長く居て下さい。ありがとう。」

祈りの時間を告げるコーランの読誦がモスクから流れてきた。患者たちは西にむかつて礼拝を始めた。少年は高く澄んだ秋の青空を仰ぎ、ひと仕事終えて一息ついたようなすがすがしい顔をして自分の部屋に帰っていった。

(一九八六年一月)

ガレイジセール

食欲の秋 大根一本五十円

去る十月十九日は、我ペシャワール会事務局が日頃の夜間屋内活動から一転して、屋外お天道様活動を行なう嬉しい一日でした。

昨年、会員の一人が参加していたガレイジセールに、ペシャワール会として参加したのをきっかけに宣伝と収入の途を狙って、春と秋に護国神社境内で行われる「シティ情報ふくおか」主催のガレイジセールに会のイベントとして参入することになったのですが、今回は春の売上げを上まわろうと事務局一同張り切り、会員の皆様からもたくさんご協力をいただきました。中でも出色だったのは熊本から贈られた新鮮野菜でありました。

その日の朝、野菜に対面した我々は果して売り切ることが出来るかと心配したのですが、ともかくと値札をつけていました。すると「大根一本百円ならどこでん売つとるよ。」の声、我々は大いに動揺し、百円から八十円、五十円と値札を書き換えました。

売り場の前面には中村先生の似顔に「頑張れ哲ちゃん。」のコピー入の手描きのポスターを掲

げ、後にはペシャワールのパネル写真を配し、手には入会案内を持ったのですが、客とのやりとりに精一杯になり、買物袋にパンフレットを入れるのがやっとになりました。

物売りの方は野菜ではみかんが一番に売切れ隣のコーナーでは衣類がブロ顔負けの売り子とそれを物ともせぬ客のやりとりで値段が乱高下（もちろん低レベルで）しつづ売れて居りました。売り子一同自信持った頃は野菜が売切れとなり、売り場に直接寄付の品物を持って来て下さる方もあり大いに賑わったのであります。益金は目標を超え、一五〇、五二五円。募金も四、八〇七円いただきました。ありがとうございました。



ペシヤワール会総会と 講演会の報告

ペシヤワール会の一九八六年度総会と記念講演会が、先にお知らせいたしました通り、去る八月三十日の夕、福岡市民会館小ホールで開かれました。約二〇〇名の参加者を得て大変熱気にあふれた集いを持つことができましたので、その会の様子について報告いたします。

まず第一部として総会がもたれ、前年度のペシヤワール会の活動報告と、今年度の活動についての提言がなされました。本会が発足して三年余り、



中村先生の働きが本格的になってくるに従って、各地に熱心な会員が着実に増加していることは、大変な喜びであります。現在会員数は既に二千名を超えています。これからも、ますます多くの人々にアピールして入会を勧誘すると同時に、財政盤強化のために継続会員の確保を図っていきたいと考えています。

第二部の講演会で、最初に、日本キリスト教海外医療協力会塩月賢太郎総主事から「JOCSSの活動」について紹介がありました。日本全国七千名余の会員、毎年一万人を越す人々からの募金、さらに数十万人と推測される「古切手運動」への参加者の善意に支えられて、すでに二十五年にわたって、アジア地域の医療の恩恵に浴していない人々に対して、先駆的な医療奉仕活動を続けて来られたことが話されました。今後とも、ペシヤワール会とJOCSSの緊密な連携・協力によって、中村先生の働きを強力に支えていきたいと思えます。

次に、香住ヶ丘バプテスト教会藤井健児牧師から、教会での熱心な支援活動について紹介されました。バザーなどが企画されているとのことでした。

感謝です。

さらに、^{ホク}邑久光明園(国立らい療養所)小原安

喜子医師から、「らいの基礎知識」についてお話しいただきました。三〇―四〇年前までは日本でも、街でハンセン病患者を見掛けることがあつたようですが、現在では、新しい患者はほんのわずかしかな発生せず、しかも早期に発見されるようです。しかし、中村先生が働いているパキスタンやインドをはじめ、アジアの国々にはまだ、非常に多数のハンセン病患者がいて、しかも重症の人が多いとのことです。小原先生は、らい、とりわけ、アジアのらいへ取り組むために医学を志され、実際に台湾や韓国(一九七二―八〇年、この夏中村先生が手術の研修に行かれた、韓国麗水の愛養再活病院で奉仕された)で長い間らいの診療と研究にあつてこられた方です。豊富なご経験と、らい治療への情熱をもとに、しかも、多くの生々しいスライドが使われてのらいの解説は、大変な迫力でした。

「らいは、らい菌という結核菌に似た好酸菌による、ヒトの慢性感染症であり、末梢神経がおかされる疾患で、皮膚がおかされることも多い。らいという病名には、さまざまな偏見がつきまといっているので、最近ではハンセン病という呼び名が一般名として使われる。らいは遺伝しない。幼児期の濃厚な家族内感染によるものが多く、感染してもすべて発病するわけではない。らいは治る。

とりわけ近年、大変有効な治療薬が開発されている。しかし、治療には長い年月を要する。早期発見と早期治療がらいでも重要である。」

アジアの国々では、発見や治療が遅れたために、手足や顔に皮膚の潰瘍や変形が生じた患者が多数いること。中村先生が真っ先に手掛けた予防靴の大切さが良く理解されました。また、この夏中村先生が韓国にいらいの外科の研修に行かれた意味も分かりました。来たる十二月には、小原先生は同僚の眼科医と共に、ペシャワールに一週間ほど滞在して、中村先生に手術の手ほどきをして下さる予定だそうです。この会のために、お忙しいなか手弁当で駆け付けて下さり、貴重な講演をしていただきまして、本当に感謝でした。

最後に、中村先生に「この一年の活動と今後の展望」と題して講演をしていただきました。ペシャワール地区のらい診療の拠点として病院を整備してきたこと、「フット・ケア」のための靴作りと靴工場の建設に取組んで完成させたこと、などについて、例の淡々とした口調で話されました。アフガニスタン内乱の余波が直接伝わり、爆弾騒ぎなどが続いているなかで、大変な苦労があったことと推察されますが、時にユーモアを交えながらの話には、かえって裡に秘めた中村先生の仕事に対するなみなみならぬ情熱を感じさせられました。また、かの地において中村先生の働きが着実に根付いていっていることを、私たちも知ることがで

きました。これまでに、活動のための最低限の拠点作りはできたようです。

次に、これから進めようとしている仕事の概略についても話されました。その主な点は、ペシャワール周辺に居住している、二〇〇万人以上にのぼるアフガニスタン難民のなかの、ハンセン病患者に対する調査と診療を本格的に行うこと。そのために、すでにカラチのマリーアデレド・レプロシーセンターとの緊密な提携のもとに、国連機関や政府機関へも働きかけをはじめているのとこのことでした。このような広範でかつ長期にわたって、忍耐を要する活動をするためには、現地のスタッフの養成が急務であることが述べられました。信頼のできるスタッフ（理学療法士や臨床検査技師、看護婦等）をトレーニングするための基金作り、ペシャワール会からの支援を期待したいとの要請がありました。また、昨年度から巡回診療車募金を行ってきましたが、中村先生からできるだけ早期に欲しいとの希望が述べられました。車種が決まりましたので、現在、どのようにして送るか、具体的に各方面に働きかけているところですので。

「爆弾事件が続発するなど治安が悪くなり、しかも、あらゆる点で日本と異なっている場所、困難な仕事をやっていると、正直に言って辛いと思うことがあります。そのような時、自分は一人ではないんだ、ペシャワール会を始め多くの人達

が支えてくれているのだ、自分は皆の代表としてここで仕事をしているのだと、自分を励ましていくのです。」と中村先生が話されました。私達も、「先生と共に仕事をしているのだ」という思いと、これからも頑張らなくてはという覚悟を新たにしました。
(事務局 YS)

巡回診療車の愛称を募集中です。

その後、各方面のお力ぞえで、来年の初めには中村先生のもとへ、巡回診療車を送ることができるようになりました。そこで皆様からこの巡回診療車の愛称を募集したいと思います。いい名前がついたら事務局までお知らせ下さい。

僕に名前をつけてネ!



「JOCOS」のワーカーたち…

今回から中村先生の所属するJOCOSから海外で医療活動に従事しているワーカーたちを紹介いたします。

宮崎 享 医師 バングラディッシュ在住

一九六三年から七二年にかけて安子夫人と共にナイジ「リア医療協力。八〇年から夫人と共にバングラディッシュ医療協力。八四年七月第三期バングラディッシュ医療協に出発

希望の光 (その一)

あかちゃんがこの世に出てきて、はじめてあげる一声「オギャー」。あの声は美しいですね。素晴らしいですね。あの声を何度もきくことのできる助産婦さんや看護婦さんという職業は尊く聖く感じます。それにもましてこの素晴らしい瞬間を体験する「お母さん」は「偉いなあ」と畏敬の念を覚えます。男は赤ちゃんをうめないんです（あたりまえですが…）。残念です。「デモ、コマルコトあるんですよ」カンゼンプールにいるリンダさん。アメリカ人で助産婦さんの資格もあります。

「カンゼンプールにくるお母さんのなかにはお

産のあと、グラグラと尿が出るのがあるのですよ。クサクテ、クサクテ、離婚になるし、家にはおれないし、働けないし、誰もよりつかなくなるんです。「子宮脱といって、おなかの中にある子宮が外にとび出してしまうこともあるの…」「ええ、あかちゃんをとりあげることがそれほどむづかしいことはありません。予防注射だってできます。体重測定も家族計画もやりますよ。ヤツテミセマス」「でも、私たちができないことがあるんです。ホントにコマツチャウ。」

「考えただけで、ノイローゼになっちゃうの。わたし、シヨツチュウ、ウツなのよ。ウツ病のウツ。わかるでしょ。」「この前は、村で死産があったの。あかちゃんが死んで出てきたの。」

「わたし、呼ばれていったの。オートバイで村のアゼ道をいったわ。こわかった。強盗団がいるしよっちゃうんでの。40人も50人も群れをなして襲うのがあるのよ。でも「生命」って大切なよね。」「赤ちゃんは生まれたばかり。でも後産がでてこなかったの。そう、必死だったわ。だって、これ出さなきゃあ母さんも死んでしまうのよ。」

リンダさんの声は暗かった。沈んでいました。ポトポトと涙が出ていました。声がつまって話かときれてしまいました。

「お母さんは死んだのよ。」「ポツツリ言ってわつと泣きだしました。村へ行くJOCOSのワーカーたち。きつてリンダさんと同じ悲しみを味うのではありません。お祈り下さい。

(祈りの手紙36号より)



ペシャワールの散歩道 (1) 仲道 卓

ダブガリ地区といえば中村さんの病院のあるところだが、そこはペシャワール旧市街の入口のひとつにも数えられる。いわゆる都市というものゝの発生以来、不可欠な要素として形作ってきた壁と門という境界を、ペシャワールにおいて物語っているのがダブガリともいえる。

ダブガリはペシャワールの西の門である。そこに立つと陽は視線の彼方に落ちてゆくのだ。赤く染った空に浮ぶ陵線は、ヒンズークシユ山脈に連なり、スレイマン山系と展開する。

それらの山々の地は隣国アフガニスタンだ。国境という人為的なボーダーは、それら山々の地とペシャワールの低台地を分離させているが、もう少し視点をずらして人間の悠々とした生活——より広く長期的な人間の史的波動——の方は、ペシャワールとアフガニスタンの東側を一体の地としている。それは、極めて大きな文化圏の狭間の、すなわちインドとペルシャとの間にある一文化圏としてみることができる。

インドとペルシャの間にあつて、その境界上に振り子のごとく存在する地。インドであつてインドでなく、ペルシャであつてペルシャでない、その両義性故に自律性を保ち得た摩訶不思議な場所の一角がペシャワールなのだと思う。

だからペシャワールという街は、パキスタンでありながらも、隣のアフガニスタンの影を色濃く映しだしている。こんな前置の具合で散歩を始めよう。

夕陽をバックにダブガリから旧市街へと入ってみると、もうバザールは人の波だ。日沈の礼拝を呼びかける声（アザーン）がモスクの尖塔より詩



われる。人々は群をなして拝所に集う。通りのふとん屋も、ベッド屋も、サンダル屋も、小憎も老人も皆同じである。その波を横目に大通りを七、八分歩くと開けた交叉路にぶつかる。ナマック・マンデイ（塩市場）という。メワマンデイ（果実市場）ともいう。

ナマック・マンデイはひとときわペシャワールのである。そこに歩く人の顔は、地元のパシユトーン（パターン人）の顔、カールルの顔、インドの顔、トルコの顔、モンゴルの顔、色んな顔がせめぎあっている。少々怪しげな臭いをさせ、なにかすごく魅惑的な雰囲気をただよわす。夕食はいつもここだ。カールル人の店の、それもトルコ系の人のものが好きなのだ。

自分と似たような顔が『なにか、食べる？』と聞く。すぐ欲目を張ってしまう。中皿に盛られたパラオ（たき込み飯）は長米。干しぶどうに人參がのつていて、飯をかき分けると羊の肉の塊が入っている。串焼きの羊肉はウズベク風のナシにはさんで喰う。煮物とサラダにヨーグルト、胡座を組んで右手で口に運ぶ。結局いつも欲目通り全部喰ってしまうのだ。食後の緑茶をすすっている頃は、もう睡魔さえ襲つて来る。

このペシャワールの幸せのおかげで、僕の体重は三キロ、五キロ、と増え続けることになるのだ。食欲の季節なのである。

(つづく)

熊本は燃えている!!

連載 ①

今号より「熊本は燃えている!!」と題して、熊本に住む会員有志による、中村先生との出会い、福岡ペシャワール会との交流など、熊本で芽ばえつつある新たな息吹を紹介していきます。

中村先生と熊本のペシャワール会

小杉 邦夫

九月五日、熊本の日本基督教団白川教会の招きで、中村哲先生が来熊された。当日は平日、それも午前中というのに四く五十名の教会員が出席されたことは驚きであった。この教会は社会問題にも熱心で、また、インド救ライに尽くされた故宮崎松記博士の母教会でもある。中村先生は、ペシャワールでの活動のスライド上映とお話を二時間あまりされた。実は私たち(原田敏幸先生と筆者)の先生との出会いは、これで二回目であった。一回目は昨年(の)帰国の折、「熊本アジアを考える会」の招きだった。出席者は九人だけ。しかし、先生は「これくらいが丁度いい」と恐縮する私たちに、やさしい言葉をかけて下さった。それから一年間、

先生は念願のライ患者用サンダルのワークショッ
プを完成させ着実に働いておられた。先生の表情
や静かな語りの中にも仕事への自信のようなもの
が伝わって感じられた。白川教会での集会后、私
たちは先生と連れだって、菊池川近くの菊水丸太
小屋に行った。夜の集いを菊水丸太小屋で予定し
ていたし、それまで先生と一緒にカヌーで川下り
をして遊ぶ計画であった。しかし、あまりにも唐
突な私たちの計画は、ペシャワールへの帰国を明
後日にして残務に忙しい先生の身体には無理から
ぬものだったようで、結局、菊水での予定をくり
上げて午後二時、先生は玉名駅より大牟田へ帰ら
れた。予定していた夜の集いは中村先生の不在で、
福岡ペシャワール会の事務局の人たちとの交流会
となった。熊本からの出席者は十二名。私たちの
無理なスケジュールもあって、出席した人たちに
中村先生との交わりができなかったことを詫びな
ければならなかった。ただ、交流会も楽しい一時
だった。特に、菊水町に住む農民の野田悦雄氏の
博識さ。それに熊本の蔵田武勇氏の肥後モッコス
的な熱弁に笑いこぼる一幕もあったりした。ま
た、来る十月十九日、福岡で行なわれるペシャワ
ール会主催のバザーに熊本から野菜をカンパしよ
うという提案も出され、熊本の有志は応援を承諾
した。十月十七日。私たちと、蔵田氏は約束の野
菜を市場より仕入れ、丁度来熊されていた事務局
の人に頼んで福岡へ運んでいただくことにした。

熊本の吉永公祐氏がバザーの手伝いで福岡へ行く
ということに参加出来ない私達の後を引継いで下
さるようになった。

私達はこの様にして中村哲先生をとおり、また、
ペシャワールの医療問題を考える中で、人と人の
親しい交わりが出来てゆくことを感謝します。今
後共、皆様の御指導をお願いする次第です。

- ◆飯田 精一様——御息のカラコルムでの遭難のためパキ
スタンに行かれ親切にしてくれた現地の人々に役立ててほ
しいということでご寄付いただきました。(ご冥福をお祈り
いたします。)
- ◆西南高校インターアクトクラブ・香住ヶ丘バプテスト教会
バザーを開いていただきました。
- ◆西南高校生徒の皆さんからの献金
- ◆北九州アジアを考える会からパキスタンの民芸品の売上げ
金をいただきました。
- ◆ロータリークラブ、学校など、中村先生が講演をされた折
にたくさんの方々からご寄付をいただきました。

ご寄付ありがとうございました

声

「中村医師的日本人」

岩橋 文吉

日本人の国際化が叫ばれている。これまでの国際化された日本人というのは、いわゆる先進諸国の進んだ文化を摂取して身につけた人で、多くの場合、欧米化した日本人であった。この場合、国際化とは欧米に学んで欧米の文化を取り入れることを意味した。だから、外国語も読んで受取る外国語が一般的であつて、こちらの持っているものを先方に伝え発表することは重視されなかつたのである。

ところが、これからの国際化は方向が逆にならねばならない。日本人が海外の現地へ出かけて行って、現地の人々に奉仕することができるといふ意味の国際化でなければならぬ。日本が肥え太るために海外の文物をとりいれるのではなく、日本が持っているものを現地の人々のニーズに答えて惜しみなく与えることができる日本人になることである。そうすることによって、謙虚に現地の人々に奉仕し、苦業を共にし運命を共にすることに生甲斐を見出す日本人になることである。

この意味で、中村哲医師こそ私たちの希望そのものであり、中村医師を支えるペシャワール会の働きは、正に現代日本の課題に答えるものである。

日本が二十一世紀にむけて何となくキナ臭い険悪な世界情勢の中で、平和憲法を守り抜き、尊敬に値する国となる道は、日本中にペシャワール会と同様の組織ができ、次から次と世界各地へ多数の中村医師的日本人を送り出すことではなからうか。私はペシャワール会と中村医師の働きに希望をたなぐものである。(ペシャワール会運営委員)

平野 美和子

中村哲医師のパキスタンでの活動や現状を伝える文章を読ませていただいていますと、ほんとうにその困難さが伝わってきます。何でもそうですが、実際に行動していかないとわからないことは多いものです。

以前に私の働いていた施設には、アジアからの研修生の方が毎年一名はおられました。パキスタンからも、知恵おくれの子どもたちの通園施設を創られた女性や、そこで働く女性が家族の反対や社会通念を押し切つて、遠く離れた日本に來られていました。風土や習慣の異なる土地で、最初は寒さや食事に閉口したり、うまく意志が通じないという様子がみられました。子どもたちと共に生きるのだという一つの共通した目的と、キリスト者として神から与えられた道だといふ基盤を持つておられたため、一つ一つ、自分からぶつつかつていく姿には、教えられることがたくさんありました。子どもたちが残さずに食べているからと、

きらいな納豆や豆腐を口に入れ、また、これまで女性は肌を見せないという習慣にあつたにもかかわらず、子どもたちの水泳訓練に進んで参加されていきました。

その女性たちも、いったん自国に帰ると、様々な困難に出会うようでした。こちらからもスタッフを派遣し、同じ状況の下で汗を流しても、社会・文化・習慣の違いは大きいものです。相手の国の文化を大切に、かつ、悪習のみを改善することもないへんですが、自分たちが、一般的にいう利益やむくいや自己満足を決して得ることのない行動を続けて、弱い人達と同じ立場で共に歩むということは、やはり人間の思いや力にたよつていては、いつかはつぶれてしまうことです。支えとなる仲間がいて、そして、多くの祈りと行動による励ましや、人間としての限界を超えた信仰を与えられていてこそ、続けられることだといふことを、つくづく感じます。

中村哲先生とその活動を支える多くの方々御活躍を心からお祈りいたします。

(北九州市 小倉北区 O.L.)

富盛 良子

ペシャワール会報No.9で、「不幸をくいのにするジャーナリストやミッシヨナリーたち、慈善をうりものにするキリスト教関係者に怒りを覚え、必ず罪悪感を覚えさせるような皮肉を述べて一矢を報いることにしています。」という中村医師の手紙

を読んで、胸をグサリと刺される思いがしました。一時帰国をされ、日本の中でヌクヌクと暮している私達を見て、再び苛酷なペシャワールに単身赴任されて行った中村医師の心中を思う時、言い表わす事の出来ない程のお詫びの気持ちで胸が一杯になってしまいます。現地で苦しむ人々と共に生きる中から、この人々にとって何が必要かを的確に判断し、実行に移していく事の大切さ考えた時、一体私達に何が出来るかと問えば、やはり中村医師に思いを託す他に何も出来ないという回答が返ってくるばかりです。申し訳ないと思いつつ、せめてペシャワール会の会員として、中村医師の今後の御活躍と御健康を心からお祈り致します。

(福岡市 早良区

主婦)

原 由美子

私はクリスチャンではありません。政治に関心がありません。外国へ行ったことがありません。毎朝定期的に会社へ出かけ、給料をもらって、御飯を食べて、それ以上でもそれ以下でもない現実を生きています。そんな私の耳に、「慈善活動」という言葉は、どこか非現実的な遠い響きでした。飢える国に食糧を、というマスコミのかけ声のつて献金したり、毛布を送ったりした事はあります。しかし、募金が軍事費に化けてしまう国もあると聞いたり、送られたたくさんの毛布がその地に行き着かない前に抜き取られているという記事を読

んだりするにつけ、どういう活動が現実にはひとりの人を生かすのに役立つており、又どれが単なる自己満足で終わっているのか判らない事実には失望させられてきました。

私がペシャワール会の会員となったのは、中村医師の現実的で淡々とした人柄が、私の会費が有効に生かされていることを実感させてくれたからに他なりません。辺境の地で医療活動している医師というと、列をなす患者さん達を前にしてメスをふるい、次々に難病を治していくヒーローの姿を思い浮かべてしまいます。しかし、会報の中の中村医師の手紙や、パキスタン・プロジェクトの資料を読むと、現実はそのようなイメージから全くかけ離れていることがよく判ります。医療とは無関係なところで大きな努力を使わなければならなかったり、最低の設備を整えるまでに大変な苦労があったり。そんな状況の中で、私たちの支援をお医者さんに望まれるものは、「ヒーロー性でもカリスマ性でもなく、「持続するエネルギー」なのです。中村医師は、たとえて言うならば、土砂崩れが起きた山道で、目の前の石からひとつひとつ取り除いて道を開いていく人のようです。幻想を抱かず、地道に、しかしいつも行動していて、少しずつ大きな事を実現させていける、そんな人であると私は感じ、信頼していこうと決めたのです。私は、中村医師の活動が地に足のついたものである限り、ペシャワール会の会員であり続けようと思っています。(福岡市 中央区 O.L)

書き損じたハガキ：眠っていませんか!!

これを書いている私などは、よくハガキを書き損じて、捨てるのはもったいないので机の奥にはおむつています。このようなハガキは、郵便局で五円をたして新しいハガキにかえてくれます。時期遅れの未使用年賀状なども役に立ちます。何枚か集まりましたら、事務局の方へ持って来てくださるか、送ってください。

- ☑ペシャワールへ向う中村先生を空港で見送ったのは九月、ついこのあいだのような気がするのに、もう年末を迎えてしまいました。今年もいろんなことがありましたが、ようやく来年、巡回診療車を中村先生のもとへ送れるようになり感謝無量です。皆様の変わらぬご支援に感謝いたします。
- ☑このたびフックス通信ができるようになりました。番号は、福岡YMCA内092-712-14223です。ご利用下さい。

☑会員の皆様からの声をお待ちしております。

